

人の生死を分けるものは意識の継続？

「ポックリさん」か それとも 「ジンワリ、ジックリ」か 好みは？

「統計学（生命表）」の次は「哲学（人の死とは）」・・・

人の「生」は、意識の継続？

統計の手法で、人の平均的な余命が推測される。それが「生命表」である。とりあえず、今の日本の社会制度、食糧や医療等の状況からすれば、「普通」に生活をしていけば、80歳前後までは生きるのが平均である。

という場合の、「80歳前後までは生きる」の中身は、とりあえず、脳死状態も含む「生」であると考えられます。役所の記録簿の上でも死亡となつて、初めて生命表のもとになる統計数値で死亡の中に分けられるのですから。

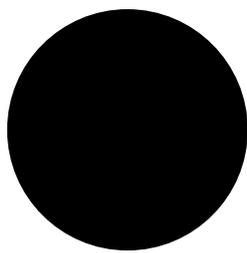
失踪宣告による書類上の死亡の取り扱いは、生命表の計算の上ではどうなるのか、わかりません。釜ヶ崎ではよく聞く話ですが、釜ヶ崎以外ではめつたに聞かないので、どう取り扱っても、平均余命等の計算結果に大きな影響をあたえないと思われまふ。

一般的に、人の死は、肉体の死として話題になりまふ。有名人の葬式や告別式などの報道で参列者のコメント「私の心の中に、生きている」と、よく伝えら

ますが、脳死状態でそんなコメントをいったら、周辺から袋叩きに会うことでしょう。

「ポックリさん」信仰があります。自分が死ぬときには、長患いすることなく、ポックリ逝きたいという願いの表れです。多くの人の願いでしよう。

左の二つの図は、「死」をイメージ化したものです。死を表すのに、黒を使いました。



右側の黒丸は、生と死が、ハッキリとした境界を持つていることを表しています。一般的に、死はこの形で現れます。交通事故で、医者が見離れた患者であれ、意識の途絶えと肉体の死が一致している状態を意味します。

左は、中心に向かって徐々に黒が濃くなって行き、真つ黒となつて死になります。

肉体のことは、とりあえず別に分けて置いて置くことにします。

ある個人が、ある個人である根拠は、その人自身にとつては、記憶の連続です。

朝おきたときに、昨日のことを覚えており、それまでの記憶に基づいて、今日の行動をおこない、記憶の連続を前提に明日のことを考えます。

ある個人にとつて、生とは、自身の記憶の連続です。記憶の途絶えは、特定個人にとつては死です。その人自身は、過去からの一連のつながりのある固体として自分を認識できないのですから。

記憶喪失や自分自身や自己の周辺に関する記憶が薄れる認知症なども、その人個人にとつては、死です。周辺の人は、その特定の人に関する記憶を継続して維持している限り、その記憶に基づいて、その人が生きているとして対応します。病気で人が変わったようだと、思ったとしても。

左側のイメージ図では、当人と周辺で、死のイメージが異なることを示しています。しかし、記憶に頼る個体としての自分の死としては、右と左で大差はないといえます。

記憶が薄れ、今日の環境だけで生きる「枯れた死」も望みたいような気もしますが、誰もがそんな環境に生きられるわけではありません。ところで、過度の飲酒や栄養の偏り・不足は、脳の機能低下・認知症につながるって、知ってます？

生活保護は、無差別平等、困窮の事実に基づいて、誰でも（永住権を持つ外国人を含む）活用する

ことが出来ます。65歳以上でなければ、あるいは病気でなければ受けられない、というのはウソです。

大阪市立更生相談所（市更相）は、阪堺線の東側、公衆便所横のガードを東に抜けて、交差点を渡ったところにある建物です。

医療センター（大阪社会医療センター）は、「ある時払いの催促無し」、借用書で受診できる医療機関です。市更相あるいは西成労働福祉センターで診療依頼券をもらってから行く必要があります。

医療センターは、センターの建物外の東側に入り口があります。

「自助努力援助のための手引き書—生活保護は怖くない」（無料）をまだ受け取っていない人は、声を掛けてください。

※ 居所（アパート・マンション）を確保できていない人については、生活保護申請後の手続きの期間

（通常2週間）、生活保護施設で待機することになりました。生活保護申請後に、一時宿泊提供を受け、各施設職員の助言を参考に、住居を探してください。アパート・マンションの探し方については、各施設の職員が手伝ってくれることになりました。

20歳から50歳代前半くらいまでの人は、自立支援センターを活用する道もあります。寝場所・食事を提供し、就職活動を支援する施設です。利用期間は、3ヶ月、事情により6ヶ月です。入所希望者は、大阪市立更生相談所（市更相）で相談を。